

光景だった

写真学科

岸 剛史

Memory of Sight

Department of Photography

KISHI Takeshi













都市から郊外へと向かう無人の風景の中を歩いてゆくと、眼前の景色が不意に現実味を失い、薄っぺらな形だけの書割の様に思える瞬間がある。

目の前にある景色が人間的な意味を失って、私と世界が断絶するかのような感覚。

見慣れた眺めが突然名前の無い景色に変わるとき、私はその断片を写真に収める。

そこに写っているのはいまだ発展を続ける都市の作りかけの姿であるにも関わらず、どこか人間に打ち捨てられた文明の廃墟の景色にも見える。

それは写真によって発見する景色なのである。

写真が事象を「記録」するのは当然の事のように思えるが、より重要なのはそれを「再生」することではないだろうか。

光によって記録され再生される景色。私はそれに「光景」という名前を付け、その断片である写真を繋ぎ合わせる。

写真に記録された光景は、かつてどこかで私が見ていた光景の記憶を呼び起こし重なり合う。

かつて眼前にあった光景が過去に変わってゆき、写真を見る「いま」において、私は世界と自身が緩やかに繋がるのを感じるのである。